研修の現場から

技術を身につけるのはもちろんのこと、研修の現場には「であい」があります

札幌市水道局では、昭和50年から水道技術を学ぶJICA研修員を受け入れており、その数は、総勢600名を超えております。現在水道局で受け入れている集団研修コースには、「水道技術者養成Ⅱ」と「寒冷地水道技術者養成」の年に2つの研修コースがあります。

僕自身は、昨年からJICA研修を担当したばかりですが、1年のうち5ヶ月以上も海外の研修員と接しているせいなのか、英語がうまくなったような気がしています（自己満足？）。研修員を受け入れている期間中はもちろんですが、事前準備の段階から忙しい毎日を送っております。講義や実習だけでなく、研修員同士が早く打ち解けられるよう、講義後の焼鳥屋や居酒屋での意見交換会、土日に野外コンサートやサッカー観戦等、研修員同士が触れ合う場を研修期間に盛り込んでいます。

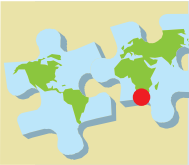
研修員と出会った最初の1ヶ月は、お互い顔と名前と会話のクセを覚えるのにとても長く感じますが、残りあと1ヶ月を切るあたりから、「みんなと離ればなれになりたくない」、「もっと札幌にいたい」、と何気ない会話の中にちらほら、別れの瞬間を意識した言葉がこぼれてくるのを耳にして、「寂しい気持ちを吹き飛ばしてやるぞ」と最終イベントを企画して、より親身になって接しようと、俄然力が入ります。

水道局、JICA、NRCそしてJICEの4つの機関のタイアップが功を奏して帰国当日は、研修員の皆さんは「じゃ、また」と、この間すっかり板についた日本語で挨拶して元気に手を振り去っていきます。僕自身、研修員の皆さんと別れるのは寂しいですが、「何事もなく研修を終え、無事帰国させることができて、本当によかった」とほっとした気持ちも半分です。

今年もまたJICA研修が始まります。昨年の研修員たちの顔を思い浮かべて、今年はどんな人たちが来るのだろうかと、新たな出会いに期待が膨らんでおります。**（札幌市水道局　瀬川一弘）**

上水道の工事現場で説明を受ける研修員

研修の合間に研修員同士が触れ合う機会が様々な形で盛り込まれています



途上国の現場から

南アフリカでの協力隊活動を終えて

1年9ヶ月の協力隊活動を終え、3月末に帰国しました。怪我や事故もなく無事に帰国できたことを大変うれしく思うと同時に、お世話になったJICAの方々をはじめ現職参加をご承認いただいた北海道教育委員会、在籍校であった女満別高校、そして任国南アフリカの皆様に感謝申し上げます。

南アフリカで過ごした1年9ヶ月を振り返るとき、時の過ぎるのは本当に早いものだと痛感するとともに、つい1ヶ月前までは南アフリカで生活していたことがまるで遠い昔のことのように思え、とても不思議な気持ちです。もうはや日本人に戻ってしまったということなのでしょうか。

南アフリカの教室の風景。教室の雰囲気は日本と異なりますが、みんな熱心に学んでいます

2年前、南アフリカに着いた時には、鳥の鳴き声の大きさや時間の流れの緩やかさ、人々のおおらかさ、想像をはるかに上回った貧富の差の大きさ、太陽の偉大さなどに驚きました。先月帰国した時には、人の多さをはじめ、常に動いている人や街、そのスピードの速さ、情報伝達の速さなどに驚き、そして何よりも和食のおいしさに感動しました。

アフリカ諸国のほとんどがそうであるように、南アフリカもエイズ対策や雇用創出、教育、インフラ整備、治安維持などなど実に多くの課題を抱えています。しかし、人々は誇りと希望を胸に、自然や先人への畏敬の念を忘れずに、そして輝く笑顔とともに毎日を生活しています。私はこれからも南アフリカを応援し続けます。Ngyabonga!(ありがとう！)南アフリカ！

（15年度1次隊　南アフリカ　理数科教師　岩崎弘之、現石狩翔陽高教諭）